

## ◆京都市立西京極中学校 1年間の振り返り◆

### ■学校教育目標

「校是」 自立と貢献

自立

#### 【目指す生徒像】

・自分で考え、決定し、責任をもって行動する。 ⇔ 生徒の声を聴き、認め、ほめる。

貢献

#### 【目指す生徒像】

・社会の多様な人たちの考えに触れ、それを尊重して受け入れる。 ⇔ 互いに尊敬の念をもって、すすんで協働する。

#### 【目指す教職員像】

生徒の声を聴き、認め、ほめる。

#### 【目指す教職員像】

互いに尊敬の念をもって、すすんで協働する。

### 学校教育目標の達成状況

本校生徒の「学校や社会の決まりを守っている」は、全校生徒 570 人中後期 552 人 (96.7%) が学校や社会の決まりを守ることを大切にし、そして、学校生活を生徒会が中心になり、生徒自らの規範意識の高い行動により、落ち着いた学校を築いている。生徒の努力を教職員の支援により支え、「学級や部活動、授業の中で、自分の努力が認められている」と 1 年を通して 88.5% の生徒が「そう思う」「大体そう思う」と肯定的に答えており、教育目標である「自立」を目指す教職員像にある支援により、おおむね目指す生徒像を達成することができた。だた、「そう思わない」と答えた生徒は全校生徒 570 人中 15 人 (2.5%)、前期と後期は同数だった。今一度、生徒の自立した行動を認め、褒める場面を増やせるように、「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」本市の教育実践を進める必要がある。「困ったことや悩みがあるときに、相談できる先生がいる」は、1 年を通して全校生徒 570 人中 497 人 (87.1%) の生徒が「相談できる」と答え、教職員と生徒との信頼関係が本校の強みとなっている。これは、目指す教職員像の「生徒の声を聴き」の「聴き」を丁寧に行っている成果である。しかし、「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えていた生徒が 74 人 (12.9%) おり、各クラスで 4~5 人の生徒がそれぞれの困りや悩みを先生に打ち明けられずにいる現状がある。これらの生徒の状況を真摯に受け止め、さらに、生徒会活動や学級、部活動などの集団活動を通して、「個を集団で支える教育活動」を進め、学校や社会の一員としての自己有用感をもたせる必要がある。「こころのつながり」は、人を成長させることにつながる。本校の強みである、「信頼関係」を基盤に、人を成長させる学校づくりを進めたい。自分の学校や地域に対しては、前期より増加し、全校生徒 570 人中、後期 514 人 (90.1%、前期: 88.5%) の生徒が誇りをもち大切に思っていると答えた。友人や他の人にに対して、思いやりのある行動がとれると全校生徒 570 人中、後期: 555 人 (97.4%、前期: 94.7%) の生徒が回答しており、人を大切にする基本的な優しさや思いやりをはぐくんでおり、「社会の多様な人たちの考えに触れ、それを尊重して受け入れる。」こと、人権尊重の精神に基づいた、「貢献」について考え、行動ができる生徒に成長している。

### 次年度に向けて

- ① 今年度はコロナ禍が気になる中ではあったが、行事や取組を限られた条件の中で工夫しながら行い、一定の成果と達成感を得られた。次年度では、本校の強みである、「困ったことや悩みがあるときに、相談できる先生がいる」の 87.1% の肯定的な意見や、「学級や部活動、授業の中で、自分の努力が認められている」と 88.5% が感じており、生徒が認められ安心できる、自己肯定感が育つ環境が教職員の努力により育まれており、これをベースとして、生徒の自己決定力を高めるより集団を意識した取り組みを行い、学校教育目標を達成できるように工夫をしたい。
- ② 授業については、生徒全体 570 人中後期: 61 名 (10.7%)、各クラス 4 人程度の生徒が授業をわかりづらいと答えている。「全員がわかる授業」となるように授業改善を進める必要がある。特に、基礎・基本を定着させる段階では、友だちと学び合うことを通して、学びをあきらめないで自分の内面にしっかりと向き合うことができる学習環境を確立したい。「主体的・対話的で深い学び」などの「考える時間」が発生するような授業デザインを設計、研究する必要がある。学びを深めるためには、

生徒の体験や身の回りに興味関心をもたせる授業実践が重要であり、さらに研究、実践を図りたい。本校の課題である家庭学習は、平日の学習時間の「ほとんどしない」が全校生徒 570 人中 19 人前期 (3.2%) から後期 70 人 (12.2%) に増加しており、学校の授業がわかりにくいくらい後期 61 人 (10.7%) の生徒が回答している数値と近い。このことから、授業のわかりにくさが家庭学習につながっていない事実があると考える。この数値を 0% にするために、教室の授業に興味・関心がもて、楽しいと感じられることが大切である。それは、生徒が、今の学びに見通しがもてる授業と、何が理解できていないのかを分析し改善できる機会をもたせる授業デザインを学校全体で進める必要を感じている。

- ③ 規範意識の向上については、「学校や社会の決まりを守っている」と答えた生徒は、全校生徒 570 人中後期 552 人 (96.7%) が学校や社会の決まりを守ることを大切にしているが、18 人 (3.3%) の生徒が否定的に答えており、全校生徒で社会や学校のルール（貢献）を考え守る行動を取ることで社会や学校での自己肯定感が高まることを体験させ、自身の成長につながることを経験させたい。
- ④ それぞれに困りや課題を抱えている生徒は多数いる。特に、ボーダーのグレーゾーンにいる生徒たちの小さな声を聴き、個別の指導を進める必要を感じている。本校には、別室で対応する S R (サポートルーム) を設置しており、通級指導や学校に行きにくい生徒への手立てを適切なものにするため、情報を共有化し、効果的な実践を定着させたい。
- ⑤ 生徒会活動では、ボランティア活動に力を入れており、地域とともに「服のチカラ・プロジェクト」を実践している。今後も生徒の自主的な力の育成や学校や社会に貢献する力、そして、地域に貢献できる力を育成したい。
- ⑥ 生徒会を中心に、今の自分たちがやりたいこと、考えたいことなどを総合的な学習の時間の目標に照らし合わせて議論させ、「縦割り」の活動などを計画、実行、検証を行うなど、自己決定のできる場面を創出したい。
- ⑦ 小中連携として、「プレ中学生（オープンスクール）」を実施した。生徒会が中心となり、中学校を小学 6 年生に紹介するなどし、生徒が活躍する場面作りが設定できたと考えており、今後も小中連携を推進する。
- ⑧ 教育実践については、PDCA サイクルを意識して振り返り、意図をもって OJT を進めている。働き方改革は一歩進み、教職員の意識や同僚をいたわる思いなどが定着しつつある。次年度は更なる意識改革と時間外勤務時間の減少を進める。
- ⑨ ケータイやスマホを 2 時間以上使用している生徒は、後期 : 65.9%。1 時間以上使用するは、後期 : 22.8%、合わせると 88.7%、全校生徒 570 人中 506 人になる。S N S の使用による生徒間トラブルも増加しており、いじめへと発展するケースもある。生徒に対しては、使用時間と学力の関係等やコミュニケーション等について考えさせたい。保護者には、P T A と協力をして、もたせることのマナーやトラブル等を未然に防ぐことなどを啓発したいと考える。